

飛ばない竹トンボ

足柄上郡支部 内藤 剛(子)

戦没者 内藤 利雄

戦没地 フイリピン

父の位牌の表には戒名のほか、「昭和二十年七月八日」裏には「故陸軍兵長・父の氏名・於比島ミンダナオ島シラクオ方面・戦病死」と記されているが実際には死亡の日も死因についても確たるものではなく、いつ、どうして死んでいったのか何も判っていないのではと思っている。

父が召集されてから戦死の知らせが届くまでの情報は極めて少ない。まず、私自身満三歳と数ヶ月で別れた父の記憶は全くとってよいほど無い。

唯一、家の裏の竹藪から切り出した竹片を削り、私に竹トンボを作ってくれている男性の姿が記憶の隅にかすかに残っている。しかし、その男性が父であったかどうか判然としないし、竹トンボが飛んだ記憶も無い。

父は母が昭和十九年十二月生まれの妹を身ごもったことも知らずに出征し、その後の母からの手紙も受け取っていないと思われる。

父は内地で三ヶ月の教育を受けた後、家族に会うことも叶わず行き先も知らされないまま軍用

列車に乗せられたようで、列車がたまたま国府津駅に停車した際、そこに居合わせた駅員に一冊の手帳を託し、それが義理の叔父を経て家族の許に届いたが、それには主に農事の手順等が書かれ、どこに向かっているというようなことは何も書かれていなかったそうである。その唯一の遺品ともいえる手帳の在りかも、今は老いた母の記憶からは消え去っている。

フィリピンに派兵されているのを家族が知ったのは戦地から家族や親族に宛て、何通も出したのであろう内の一通が父の妹の嫁ぎ先に届いたことによるもので、それ以外は家族の許にさえ一通の便りも届いていない。

昭和二十年七月五日には米軍のマッカーサー元帥がフィリピン全土の解放を宣言した。（前年の七月七日にはサイパン島の日本軍陸海守備隊が玉砕した）とされており、父もその頃死んだものとされているが、実際にはその前に餓死していたのではないかと思っている。

なぜなら「フィリピンでの戦没者総数約五十万人は中国全土でのそれを上回る最悪の戦場。それも餓死者とゲリラ攻撃による犠牲者が多いことに特徴がある」と言われているからである。この様に過酷な戦場で、三十五歳になり、体力的にも若い兵士に劣る父が生き残ることは極めて困難で、出征前には二町歩を越える畑を耕作し、食糧生産に励んでいた人間が餓死していったと思うと悲憤の極みである。

従って、遺骨や遺品は勿論無く、墓には名前が記された一片の木端が葬られている。

こうして、十一歳を頭にした五人の子供の養育と農地の管理は母と六十歳の少し前で壮健であった祖父の双肩に重くのしかかった。

戦後、日本は酷い食糧難と物資不足に見舞われたが、幸い農家のため、都会の住民に比べれば少しはましであった。買出しに來た人達は捨てようとしていたさつま芋や里芋の葉や茎までも持ち帰り、代わりに泣く泣く手放したであろう品物を置いて行つた。お陰で私は小学校の時には、こうして得たその時代には不相応な革製のランドセルを背負つていた。とは言え、叔父たちや東京からの疎開で、まだ我が家に居た私の従兄弟等を加えた大家の生活を支えるため、母や祖父は朝早くから夜遅くまで働かなければならず、姉達もその手伝いや幼い弟妹の子守にと立派な労力となつていた。

今、認知症の進んだ母は「自分一人が働いた」といつているが、実際には家族皆で出来ることをしてきたのである。特に七十七歳で亡くなる二、三ヶ月前まで働いてくれた祖父に対しては本当にありがたく思う。同時に悲惨な戦争を起こし、徒に続行させた当時の為政者に対し、強い憤りを感じている。